

ツール・ド・北海道における医療サポート体制

○山田 隆宏^{1), 2)}, 青木 昌弘^{1), 3)}, 成田 寛志^{1), 4)}

¹⁾ ツール・ド・北海道協会 医療班

²⁾ 済生会平塚病院 整形外科

³⁾ 札幌医科大学 医学部リハビリテーション医学

⁴⁾ 登別厚生年金病院 リハビリテーション科

【はじめに】

我が国最大の自転車レース「ツール・ド・北海道」は毎年9月に行われ、約1週間をかけて北の大地を駆け巡る「町から町へ」移動するステージレースである。2009年で23回目を迎えた本大会における医療サポート体制について報告する。

【救護体制】

事故に対し医療チームはドクターカー1台、救護車2台の計3台の車両で対応する。各車両にはドライバー、看護師、大会役員、ドクターの4名が乗車しサポートする

レース中は常に移動しているため円滑に救護活動が行われるためには医療班のみでなく、審判を含む各種大会関係者との連携や連絡体制の構築、事前の支援病院の選定・把握、さらにはコースの把握等多くの要素が必要とされる。

【救護活動】

事故が発生した際、大会無線でドクターカー・救護車に事故状況が伝わり、医療班は事故地点に急行する。

レース中の加療は応急処置にとどめ、走行可能な選手は早期に競技復帰を目指す。リタイアする選手は最後尾の収容車に収容される。重症のため現場で治療不可能と判断された選手は現場から救護車（または、地元の救急車）を使って支援病院へ搬送・加療を行う。

ゴール後は救護テント内で治療が行われる。擦過傷に関しては、洗浄後に被覆剤を使用し治療。骨折が疑われる場合は外固定後に支援病院でのレントゲン検査および加療を行った。

医療班が治療に携わった競技者数は1990年から1997年までの8年間で126名（重傷24名）、2002年から2009年までの8年間は99名（重傷6名）であった。